國學院大學学術情報リポジトリ

大学生が卒業研究およびゼミ活動を通しての学びをどのように捉えているか：國學院大學人間開発学部のゼミ配属と卒業論文の制度・カリキュラムからの検討

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-06
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 川田, 裕樹, 備前, 嘉文
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001383

大学生が卒業研究およびゼミ活動を通しての学びをどのように捉えているか

―國學院大學人間開発学部のゼミ配属と卒業論文の制度・カリキュラムからの検討―

川田　裕樹　　備前　嘉文

【要旨】

多くの大学が「卒業論文」「卒業研究」を大学4年間の学修の集大成として、必修あるいは選択科目として位置づけている。しかしながら、「卒業論文」や「卒業研究」、あるいはそのためのゼミ活動を通して学生が学びをどのように捉えているかや、どのような能力を身につけたかは明らかではない。また、学生の意識や要望が実際のカリキュラムとどの程度マッチしているかも不明である。そこで本研究では、國學院大學人間開発学部健康体育学科の教員のゼミに所属する学生を対象に卒業論文に関するアンケート調査を実施し、学生の実態を調査するとともに、制度やカリキュラムの問題点等を検討した。その結果、卒業論文の制度については「卒業論文は必修の方がよい」、卒業論文審査会の制度については「卒業論文審査会はある方が良い」と回答した学生が最も多かった。次に、「これまでの卒業論文のための研究活動」について10点満点で評価させ、その結果をもとに分類した３つのグループ間で卒業論文の取り組みおよびゼミの活動で身についた能力を比較したところ、ほとんどの項目において、研究活動に対する自己評価が高かった者ほど、「卒業論文の取り組み」や、ほとんどの「身についた能力」に対する自己評価も高かった。また、ゼミの制度に関する質問を行ったところ、ゼミ配属制度に関しては、64.4%の学生が「ゼミ配属の制度はある方がよい」と回答した。さらに、現在「３年後期」開始である人間開発学部のゼミ配属について、どの時期にゼミ配属されるのが最も良いかを尋ねたところ、46.0%の学生が「３年前期」が最も好ましい時期であると回答した。また、１つのゼミあたりの適正人数に関しては、10人と回答した学生が33.3%、８人と回答した学生は23.0%であり、8～10名前後が望ましい人数であると捉えていた。

以上の結果より、本研究の対象学生の多くは「卒業論文」についてその意義を理解しており、また、熱心に取り組んだ者の方が様々な能力が身についたことが示唆されたが、一方で、ゼミ配属の制度面については学生の希望と乖離していることや、卒業論文のカリキュラム等において不十分な点も認められた。よって、学生の実態に応じた制度やカリキュラム改善の方策を検討すべきであると考えられた。

【キーワード】
卒業論文　研究室配属、ゼミナール

Ⅰ．緒言

わが国では多くの大学が、卒業年度に必修もしくは選択科目として「卒業論文」や「卒業研究」を設定し、単位を認定している。また、「卒業論文」「卒業研究」を作成・実施するにあたっては、学生の希望を考慮しながら研究室あるいはゼミナールへの配属（以下、ゼミ配属）を行い、その中で研究方法や論文執筆の方法、研究発表の方法などを指導するというシステムおよびカリキュラムを採っている大学が多数であろう。

國學院大學人間開発学部では卒業論文の提出は必須であり、現在、以下のような流れで「ゼミ配属～論文執筆指導～成績判定」を行っている。

① ３年次前期中（通常5月頃）に学生は希望する研究室を申請し、その希望をもとに学部教務委員会が各教員の研究室に学生を割り振るというかたちでゼミ配属を決定する。なお、國學院大學人間開発学部では、学生は自身の所属する学科にかかわらず、人間開発学部の全ての学科（健康体育学科、初等教育学科、子ども支援学科）の教員のゼミを選択できる。

② ゼミに配属された学生は、３年次後期より「演習（人間開発学部）」という科目（２単位）を履修し、配属先の研究室の教員の指導のもと、卒業論文執筆および研究遂行のためのノウハウを学習するといった、研究室での活動（以下、ゼミ活動）をスタートする。

③ ４年次に「演習・卒業論文（人間開発学部）」という科目（４単位）を履修し、1年間かけて研究室の教員の指導・助言のもと、卒業論文のための研究と執筆を進める。

④ 学生は、あらかじめ設定された期日（通常12月20日前後）までに20,000字相当（図表を含む）の論文を提出するとともに、その後開かれる卒業論文発表審査会（通常１月下旬）にてプレゼンテーションを行い、それらの審査の結果から合否判定がなされる。

一般に、上記のような「卒業論文」あるいは「卒業研究」は大学4年間の学修の集大成として位置づけられており、『國學院大學人間開発学部履修要綱（平成30年度）』においても、「大学における勉学と研究成果の総まとめとして、全員が4年次に卒業論文を提出しなければならない。（中略）学生諸君はこの論文をまとめることによって、初めて自己の学問的な立場を確立し、将来の進路の基盤を得るのであるから、その意義の重要性を十分認識しなければならない。（以下略）」と、その意義が示されている。また、平成20年12月中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』[1)] によると、「教育課程編成・実施の方針に基づき、学生を本気で学ばせるとともに、単位制度を実質化させることは、入難出易と言われてきた我が国の大学において大きな課題」であることから、その具体的な改善方法（大学に期待される取組）として、「各大学の実情に応じ、在学中の学習評価を証明する機会を設け、その集大成を評価する取組を進める」こと、そしてその例として、「卒業論文やゼミ論文などの工夫改善や新規導入」を行うことが挙げられている（下

線はいずれも筆者加筆)。これらのことから、大学教育の集大成である「卒業論文」や「卒業研究」をどのように取り組み、それを通して学生が何を学ぶことができているのかを調査・確認すること、そしてその結果をもとに工夫改善することは極めて重要であるといえよう。

一方、「卒業論文」あるいは「卒業研究」に関する研究はこれまでに多数なされているものの、「卒業論文」「卒業研究」および、そのためのゼミ活動を通して学生が学びをどのように捉えているかや、どのような能力が身についているかは明らかではない。また、ゼミ配属から論文の執筆や審査会での発表までを含めた卒業論文の制度、つまりカリキュラムの面から学修効果や学生の学びの捉え方についての検討を行った報告は少なく、学生の意識や要望と実際のカリキュラムとがマッチしているかも不明である。そこで本研究では、國學院大學人間開発学部健康体育学科の教員の研究室に所属する学生を対象に「研究室配属と卒業論文に関するアンケート調査」を行い、学生の学びの実態を探るとともに、制度やカリキュラムの問題点等を検討した。

Ⅱ．方法

A．調査概要

2018年１月31日に実施された卒業論文発表審査会の会場において、國學院大學人間開発学部健康体育学科の教員の研究室（ゼミナール；ゼミ）に所属する学生129名を対象にアンケート調査を無記名式で実施した。調査の具体的な実施方法については、卒業論文発表審査会終了時に教員から、アンケート調査の目的やプライバシー保護、本研究への参加は任意であることなどが記載された説明文を配布し、調査への協力に同意した者に対して、説明文に記載されているQRコードを各自のスマートフォンを用いて読み取らせ、専用のアンケートフォームから回答を行わせた。なお、解析対象は2018年２月４日までに回答がなされたものとした。

B．調査項目と回答方法

本研究において実施したアンケート調査は、性別や学科、入試区分などの個人属性に関する質問の他に、研究テーマを決めた時期や卒業論文のための研究活動に対する自己評価など卒業論文に関する質問や、ゼミの配属時期やゼミの適正人数などゼミ所属の制度に関する質問など合計25項目から構成されている（**表１**）。回答者には、自由記述式の設問（計５問）以外についてはそれぞれの質問項目に対して選択肢の中から、１つの設問については複数選択可、それ以外の設問は最も当てはまるもの１つを選択させた。

C．統計処理

アンケート調査の集計結果について、「計画どおりに卒業論文の研究を進めることができましたか」「卒業論文において良い研究(実験･調査･分析など)ができましたか」「自分自身で納得のいく論文を執筆することができましたか」「卒業論文審査会において、良いプレゼンテーションおよ

表１．アンケート調査の概要

１．性別　［「男性」「女性」より選択］
２．学科　［「健康体育学科」「子ども支援学科」「初等教育学科」より選択］
３．あなたが入学した際の入試区分をお答えください。　［「一般入試」「AO入試」「スポーツ推薦」「指定校推薦」「編入」「その他」より選択］
４．卒業後の進路についてお答えください。（教員の方は常勤・非常勤講師を含みます）
［「幼稚園教諭・保育士」「小学校教員」「中学校・高等学校保健体育教員」「保健体育以外の中学校・高等学校教員」「一般企業・公務員」「プロ・実業団・クラブチーム等でのスポーツ選手」「大学院進学」「未定」「その他」より選択］
５．3年次のゼミ配属を思い出してお答えください。あなたが「第一希望のゼミ」を申請した際、何を重視しましたか。（複数回答可）
［「指導教員の研究分野に興味があったこと」「自分のやりたい研究をやらせてもらえそうだったこと」「指導教員の授業を受講しておもしろかったこと」「指導教員に手厚く指導してもらえそうだと思ったこと」「指導教員に就職の手助け（試験対策や面接練習など）をしてもらえそうなこと」「指導教員との相性が良さそうであること」「特定の友人と同じ研究室に配属されたかったこと」より選択］
６．3年次のゼミ配属を思い出してお答えください。あなたは希望どおりのゼミに配属されましたか。
［「第一希望のゼミに配属された」「第一希望ではなかったが、概ね希望のゼミに配属された」「希望通りのゼミに配属されなかった」より選択］
７．卒業論文の研究テーマをいつ決めましたか。
［「3年次の9月以前」「3年次の10月～12月」「3年次の1月～3月」「4年次の4月～6月」「4年次の7月～9月」「4年次の10月～12月」より選択］
８．卒業論文のための研究をいつ頃開始しましたか。
［「3年次の9月以前」「3年次の10月～12月」「3年次の1月～3月」「4年次の4月～6月」「4年次の7月～9月」「4年次の10月～12月」より選択］
９．計画どおりに卒業論文の研究を進めることができましたか。
［「全くそう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思う」「とてもそう思う」より選択］
１０．卒業論文において良い研究（実験・調査・分析など）ができましたか。
［「全くそう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思う」「とてもそう思う」より選択］
１１．自分自身で納得のいく論文を執筆することができましたか。
［「全くそう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思う」「とてもそう思う」より選択］
１２．卒業論文審査会において、良いプレゼンテーションおよび質疑応答ができましたか。
［「全くそう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思う」「とてもそう思う」より選択］
１３．卒業論文の研究を進めるにあたって、部活動やアルバイト、就職活動・就職試験対策などとの両立ができましたか。
［「全くそう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思う」「とてもそう思う」より選択］
１４．あなたのこれまでの卒業論文のための研究活動（卒業研究審査会での発表を含む）を10点満点で評価してください。　［「0点」「1点」「2点」「3点」「4点」「5点」「6点」「7点」「8点」「9点」「10点」より選択］
１５．あなたが3・4年次の研究やゼミ活動を通して、下記の能力が身についたと思いますか。
［［専門分野に関する知識］［専門分野に関するスキル］［論理的・科学的思考力］［読解力］［文章作成能力］［情報収集能力］［プレゼンテーション能力］［コミュニケーション能力］［問題解決能力］［リーダーシップ能力］の全てについて、
それぞれ「全くそう思わない」「どちらかと言えばそう思わない」「どちらとも言えない」「どちらかと言えばそう思う」「とてもそう思う」より選択］
１６．ゼミの人数は1学年あたり何人が適切だと思いますか。　［「4人以下」「5人」「6人」「7人」「8人」「9人」「10人」「11人」「12人」「13人」「14人」「15人以上」より選択］
１７．上記の質問において、「ゼミの人数」を選択した理由をお答えください。（自由記述）
１８．現在、本学人間開発学部ではカリキュラム上、ゼミ配属が3年後期からとなっています。ゼミ配属の時期について、どの時期に配属されるのが最も良いと思いますか。
［「1年前期」「1年後期」「2年前期」「2年後期」「3年前期」「3年後期」「4年前期」「4年後期」より選択］
１９．上記の質問において、「ゼミ配属の時期」を選択した理由をお答えください。（自由記述）
２０．ゼミ配属の制度について、最も当てはまるものを選択してください。　［「ゼミ配属の制度はない方が良い」「どちらとも言えない」「ゼミ配属の制度はある方が良い」より選択］
２１．上記の設問において、「ゼミ配属の制度」を選択した理由をお答えください。（自由記述）
２２．卒業論文の制度について、最も当てはまるものを選択してください。　［「卒業論文は必修でない方が良い」「どちらとも言えない」「卒業論文は必修のが良い」より選択］
２３．上記の設問において、「卒業論文の制度」を選択した理由をお答えください。（自由記述）
２４．卒業論文審査会（プレゼンテーションおよび質疑応答）の制度について、最も当てはまるものを選択してください。　［「卒業論文審査会はない方が良い」「どちらとも言えない」「卒業論文審査会はある方が良い」より選択］
２５．上記の設問において、「卒業論文審査会の制度」を選択した理由をお答えください。（自由記述）

び質疑応答ができましたか」「卒業論文の研究を進めるにあたって、部活動やアルバイト、就職活動・就職試験対策などとの両立ができましたか」の、卒業論文の取り組みに関する５つの変数、および「あなたが3・4年次の研究やゼミ活動を通して、下記の能力が身についたと思いますか」

表２．回答者の内訳

男性	女性
50 (57.5%)	37 (42.5%)

健康体育学科	子ども支援学科	初等教育学科
67 (77.0%)	14 (16.1%)	6 (6.9%)

一般入試	AO入試	スポーツ推薦入試	指定校推薦	その他（編入を含む）
47 (54.0%)	4 (4.6%)	8 (9.2%)	12 (13.8%)	16 (18.3%)

の設問における、「専門分野に関する知識」「専門分野に関するスキル」「論理的・科学的思考力」「読解力」「文章作成能力」「情報収集能力」「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション能力」「問題解決能力」「リーダーシップ能力」の10項目については、回答結果を「全くそう思わない」を１点、「どちらかと言えばそう思わない」を２点、「どちらとも言えない」を３点、「どちらかと言えばそう思う」を４点、「とてもそう思う」を5点と得点化し、集計結果について正規性の検定および等分散性の検定を行った。その結果、今回の調査においてはすべての項目において正規性および等分散性が確認できなかったことから、「あなたのこれまでの卒業論文のための研究活動（卒業研究審査会での発表を含む）を10点満点で評価してください」で学生が選択した得点をもとに分類した３つのグループ（自己評価低値群、自己評価中間群、自己評価高値群）における３群間の回答得点の比較を、ノンパラメトリック検定であるクラスカル・ウォリス（Kruskal-Wallis）検定によって解析し、有意な差がみられた場合は多重比較検定を行った。全ての統計解析はIBM SPSS Statistics 24（IBM, 東京）を使用し、有意水準は５％未満とした。

Ⅲ．結果

Ａ．回答者の内訳

今回実施したアンケート調査の集計を行ったところ、87名（男性50名・女性37名）から回答が得られ、回答率は67.4%であった。回答者の所属学科の内訳については、健康体育学科67名、初等教育学科６名、子ども支援学科14名であった。また、回答者の人間開発学部への入学区分については、一般入試47名、AO入試４名、指定校推薦12名、スポーツ推薦８名、その他（編入学も含む）16名であった（**表２**）。さらに、卒業後の進路については、42名が「一般企業・公務員」、12名が「中学校・高等学校保健体育教員」、９名が「小学校教員」であり、これらの進路の者が

72%を占めた。

B．卒業論文における研究・執筆・発表の制度に対する認識について

まず、ゼミ配属について、「３年次のゼミ配属を思い出してお答えください。あなたが「第一希望のゼミ」を申請した際、何を重視しましたか」という設問において、「指導教員の研究分野に興味があったこと」「自分のやりたい研究をやらせてもらえそうだったこと」「指導教員の授業を受講しておもしろかったこと」「指導教員に手厚く指導してもらえそうだと思ったこと」「指導教員に就職の手助け（試験対策や面接練習など）をしてもらえそうなこと」「指導教員との相性が良さそうであること」「特定の友人と同じ研究室に配属されたかったこと」の７つの選択肢から複数回答可で回答させた。その結果、最も多かったのは「指導教員の研究分野に興味があったこと」の54名であった。次に多かったのは「自分のやりたい研究をやらせてもらえそうだったこと」の32名、３番目は「指導教員に手厚く指導してもらえそうだと思ったこと」の25名であった。以下、４番目は「指導教員との相性が良さそうであること」の14名、５番目は「指導教員の授業を受講しておもしろかったこと」の11名、６番目は「指導教員に就職の手助け（試験対策や面接練習など）をしてもらえそうなこと」の10名であった。最も少なかったのは「特定の友人と同じ研究室に配属されたかったこと」の６名であった。また、「３年次のゼミ配属を思い出してお答えください。あなたは希望どおりのゼミに配属されましたか」については、「第一希望のゼミに配属された」のは76名、「第一希望ではなかったが、概ね希望のゼミに配属された」のは10名、「希望通りのゼミに配属されなかった」のは1名であった。

次に、**表３**には卒業研究の取り組みに関する質問への回答結果を示している。まず、卒業論文の制度について「卒業論文は必修でない方がよい」「どちらとも言えない」「卒業論文は必修の方がよい」の３つの選択肢で尋ねたところ、「卒業論文は必修の方がよい」と回答した者が34名

表３．卒業研究および卒業論文の制度に対する認識について

卒業論文の制度について、最も当てはまるものを選択してください。

卒業論文は必修でないほうが良い	どちらともいえない	卒業論文は必修の方がよい
24 (27.6%)	29 (33.3%)	34 (39.1%)

卒業論文審査会（プレゼンテーションおよび質疑応答）の制度について、最も当てはまるものを選択してください。

卒業論文審査会はない方がよい	どちらともいえない	ある方がよい
19 (21.8%)	26 (29.9%)	42 (48.3%)

卒業論文の研究テーマをいつ決めましたか。

3年次の9月以前	3年次の10月～12月	3年次の1月～3月	4年次の4月～6月	4年次の7月～9月	4年次の10月～12月
10 (11.5%)	16 (18.4%)	11 (12.6%)	27 (31.0%)	18 (20.7%)	5 (5.7%)

卒業論文のための研究をいつ頃開始しましたか。

3年次の9月以前	3年次の10月～12月	3年次の1月～3月	4年次の4月～6月	4年次の7月～9月	4年次の10月～12月
4 (4.6%)	11 (12.6%)	8 (9.2%)	22 (25.3%)	27 (31.0%)	15 (17.2%)

表４．卒業論文の取り組みと自己評価について

アンケート項目	自己評価低値群（自己評価0～5点; 29名）		自己評価中間群（自己評価6～7点; 32名）		自己評価高値群（自己評価8～10点; 26名）		グループ間の比較
	M	SD	M	SD	M	SD	
計画どおりに卒業論文の研究を進めることができましたか	2.10	1.15	2.69	1.36	3.58	1.03	低・高*** 中・高*
卒業論文において良い研究（実験・調査・分析など）ができましたか	3.14	0.99	3.78	0.61	4.27	0.67	低・中* 低・高*** 中・高*
自分自身で納得のいく論文を執筆することができましたか	2.90	1.08	3.72	0.89	4.19	0.63	低・中** 低・高***
卒業論文審査会において、良いプレゼンテーションおよび質疑応答ができましたか	2.72	1.07	3.53	0.84	4.08	0.69	低・中* 低・高***
卒業論文の研究を進めるにあたって、部活動やアルバイト、就職活動・就職試験対策などと両立ができましたか	2.45	1.15	3.22	1.10	4.23	0.77	低・高*** 中・高**

注1）低=自己評価低値群　中＝自己評価中間群　高=自己評価高値群　を意味する
注2）* p<.05 ** p<.01 ***p<.001　を意味する

（39.1%）と最も多かった。その理由としては、自由記述の回答から「卒業研究を通じて知らない知識を得られる」や「大学の集大成が形に残るため」などやりがいに関する回答が多く挙げられていた。また、卒業論文審査会の制度についても「卒業論文審査会はない方が良い」「どちらとも言えない」「卒業論文審査会はある方が良い」の３段階で尋ねたところ、「卒業論文審査会はある方が良い」と回答した学生が42名（48.3%）と最も多かった。卒業論文の研究テーマを決めた時期については、「４年次の４月～６月」が27名（31.0%）と最も多く、次いで「４年次の７月～９月」の18名（20.7%）の順となっていた。また、実際に卒業論文のための研究を開始した時期についても「４年次の７月～９月」が27名（31.0%）と最も多く、「４年次の４月～６月」の22名（25.3%）が続く結果となっており、多くの学生が４年次に進級してからテーマを決定し、７月～９月頃になってからようやく研究に着手していた。

Ｃ．卒業論文への取り組みと研究活動に対する自己評価および身についた能力について

「あなたのこれまでの卒業論文のための研究活動（卒業研究審査会での発表を含む）を10点満点で評価してください」という設問によって自己評価させたところ、平均得点は6.4±2.1点であった。次にこの得点について、人数の割合が概ね等しくなるように、0～5点と回答したグループ（29名・33.3%；以下、自己評価低値群）、６～７点と回答したグループ（32名・36.8%；以下、自己評価中間群）、８～10点と回答したグループ（26名・29.9%；以下、自己評価高値群）の３つのグループに分類し、この３グループ間で「計画どおりに卒業論文の研究を進めることができましたか」や「自分自身で納得のいく論文を執筆することができましたか」など卒業論文の取り組みに関する5つの質問それぞれに対する回答の比較を行った。その結果、自己評価が高かったグループの方が低かったグループよりも、卒業論文の取り組みに関する５つの項目全てについて高い値を示していた（**表４**）。

また、「あなたが３・４年次の研究やゼミ活動を通して、下記の能力が身についたと思いますか」という設問、つまり研究やゼミ活動を通じて身についた能力に関する10項目への回答について、

表５．研究活動に対する自己評価とゼミの活動で身についた能力の関係

あなたが3・4年次の研究やゼミ活動を通して、下記の能力が身についたと思いますか	自己評価低値群（自己評価0～5点; 29名）		自己評価中間群（自己評価6～7点; 32名）		自己評価高値群（自己評価8～10点; 26名）		グループ間の比較
	M	SD	M	SD	M	SD	
専門分野に関する知識	3.38	1.05	4.06	0.80	4.23	0.65	低・中* 低・高**
専門分野に関するスキル	3.14	1.03	3.81	0.82	4.00	0.75	低・中* 低・高**
論理的・科学的思考力	3.14	1.22	3.78	0.87	4.12	0.91	低・高**
読解力	3.41	1.05	3.56	0.80	3.88	0.71	n.s.
文章作成能力	3.17	1.26	3.69	0.90	4.15	0.73	低・高**
情報収集能力	3.41	1.09	3.94	0.67	4.00	0.69	n.s.
プレゼンテーション能力	3.41	0.95	3.81	0.86	4.08	0.85	低・高*
コミュニケーション能力	2.86	1.19	3.78	0.91	4.08	0.89	低・中* 低・高***
問題解決能力	3.21	1.08	3.94	0.67	4.12	0.77	低・中* 低・高**
リーダーシップ能力	2.79	1.32	3.31	0.93	3.46	1.14	n.s.

注1）低=自己評価低値群　中＝自己評価中間群　高=自己評価高値群　を意味する
注2）* p<.05 ** p<.01 ***p<.001　を意味する

上記の分析と同様に、これまでの卒業論文のための研究活動に対する自己評価をもとにした3つのグループ（自己評価低値群・自己評価中間群・自己評価高値群）での比較を行った。その結果、「読解力」「情報収集能力」「リーダーシップ能力」は３群間で差が認められなかったものの、「専門分野に関する知識」「専門分野に関するスキル」「論理的・科学的思考力」「文章作成能力」「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション能力」「問題解決能力」の７項目においてグループ間で有意な差が認められ、それらのすべての項目において卒業論文のための研究活動に対する自己評価が高かったグループの方が、ゼミの活動で身についた能力の平均値も高いという結果が示された（**表５**）。

D．ゼミ配属の制度について

最後に、ゼミへの配属制度や活動に関する質問を行ったところ、ゼミ配属に関しては、56名（64.4%）の学生が「ゼミ配属の制度はある方がよい」と回答し、「どちらとも言えない」の25名（28.7%）、「ゼミ配属の制度はない方がよい」の６名（6.9%）よりも高い値であった。また、現在人間開発学部では３年後期よりゼミ活動が始まるが、ゼミ配属の時期について、どの時期に配属されるのが最も良いかについて尋ねたところ40名（46.0%）の学生が「３年前期」が最も好ましい時期であると回答し、次いで「３年後期」が24名（27.6%）、「２年後期」が17名（19.5%）の順番となった（**図１**）。最も多かった「３年前期」と回答した理由については、「４年はゼミ活動と就活が重なる為、早めに始めて実質のゼミ活動を充実させると良いのでは」「教育実習、採用試験対策等、個人個人で研究の進め方に個人差があるため、早めの始動が望ましいと思います」「研究に時間をかけるためにも、もう少し早くても良いと思った」「１年半だと短すぎると思うので、少なくても２年間ぐらいの期間は必要だと思うからです」「三年生の時期から卒論を準備すべき

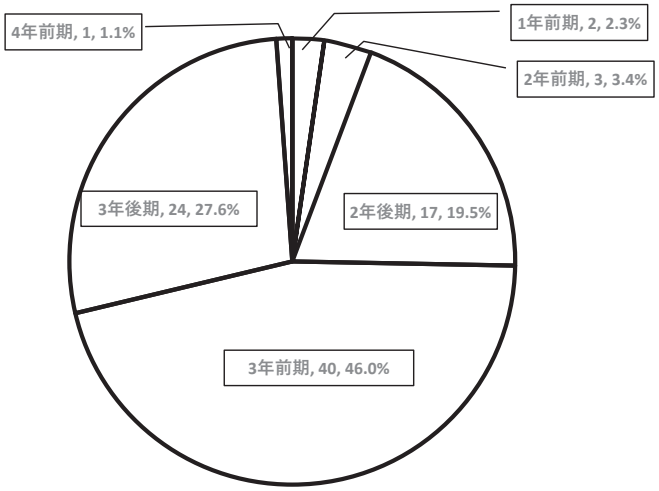

図１．ゼミ配属の時期について

だと思うため」といった自由記述での回答がみられた。

そして、１つのゼミあたりの適正人数に関しては、10人と回答した学生が29名（33.3%）と最も多く、次いで８人（20名・23.0%）、12人（13名・14.9%）、６人（10名・11.5%）の順となり、８～10名前後が望ましい人数であると捉えている者が多いことが明らかとなった。そこで、８～10人と回答した者が自由記述で書いた理由に注目してみると、「多すぎず、少なすぎず」「多過ぎても先生が大変。少な過ぎても討論が盛り上がらない」「実験を進めるにあたって適した人数だから」「多すぎると先生に見ていただける時間が少なくなってしまうため」「先生と関わりを持つのに適切な人数だと思うから」といった意見がみられた。

Ⅳ．考察

Ａ．学生の卒業論文に対する認識と身についた能力について

本研究の結果より、卒業論文が必修でない方がよいと考える者は約３割に満たなかったのに対し、卒業論文は必修であるべきと考えている学生は約4割にのぼった。また、卒業論文審査会についても、ある方が良いと考えている者は約半数にのぼり、ない方が良いと思っている者は約2割にすぎなかった。これらのことから、今回の研究対象である國學院大學人間開発学部の学生は、大学での学修の集大成として卒業論文を執筆すること、および卒業論文審査会にてプレゼンテーションを行うことに対して肯定的に受け止めている者が比較的高い割合で存在していることがうかがえた。人文科学系学科を対象にした1990年以降の卒業論文の開設状況の調査[2)]によると、必修から選択への移行が目立っており、その理由としては「学生の学力低下のため」（16学科）が最も多く、次いで「教員多忙化のため」（10学科）、「卒論以外が充実のため」（７学科）、「卒業時満足度向上のため」（６学科）などが挙げられている。一方、佐々木[3)]は理学療法教育校に対

して卒業研究に関するアンケート調査を行ったところ、理学療法教育校122校のうち、「卒業研究」を開設（開設予定を含む）しているのは90校（74％）であり、うち、4年生大学では40校中38校が開設していたこと、そして開設理由としては、「カリキュラム上の重要な位置づけ」「在学中の教育効果」「卒後の臨床実践能力向上」「研究活動の前段階教育」「大学院進学のため」など多岐にわたる回答であったことを報告している。学部あるいは学科によって実状は大きく異なるであろうが、学力・能力を向上させたいからこそ「卒業論文における研究～論文執筆～プレゼンテーション」といった学習者主体の学びが必要なのであり、本研究の結果のように一定数の学生が卒業論文の執筆や研究内容の発表に理解を示しているのであれば、卒業論文における学びがより質の高いものになるよう、学生の研究活動を推進させていくことが望ましいと考えられた。

次に、本研究の結果より、卒業論文の取り組みに対する自己評価が高い者の方が、計画通りの研究の遂行、良い実験・調査・分析、納得のいく論文執筆、卒業論文審査会における良い発表、私生活との両立などができたと認識していることがうかがえた。また、卒業論文の取り組みに対する自己評価が高い者の方が、専門分野に関する知識やスキル、論理的・科学的思考力、文章作成能力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力や問題解決能力が卒業論文をとおして向上したことを実感していることが明らかとなった。谷村[4)]は、学習院大学文学部卒業予定者645名を対象に、「知識」「深い思考力」「コミュニケーション」「自立の度合い」の4つの側面に関する成長感（全９項目）と「卒論の執筆に真剣に取り組んだ」かという卒論熱心度との関係を分析している。それによると、「協働力」では両者の関係は認められなかったものの、「専門知識」「幅広い知識」「人間探求力」「批判的思考力」「文章力」「口頭説明力」「自己把握力」「計画的行動力」の8項目において、卒論熱心度の高い群の方がこれらの成長感が高く、中でも「専門知識」「文章力」「計画的行動力」ではその関連が顕著であったことを報告している。谷村[4)]の報告と本研究とで学生が身についた能力の項目が若干異なる部分もあるが、これは、谷村の調査対象は文学部であるのに対し、本研究では対象が健康体育学科に所属する教員にゼミ配属された学生であること、つまり、健康体育学科が研究対象とする健康・スポーツ科学は人文科学、社会科学、自然科学にまたがる複合領域であるために、所属する研究室によって身につく能力に違いがあるからかもしれない。いずれにせよ、自己の研究への取り組みに対する評価が高い者ほど、卒業論文を通して学生が多岐にわたる能力を身につけることができたと実感している点については、谷村[4)]の報告と本研究は一致しており、学生への指導という点からは卒業論文のための研究活動に真摯に向き合わせること、すなわち、中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて(答申)』[1)]にあるように「学生を本気で学ばせる」ことの重要性が示された。既に述べた佐々木[3)]の報告では、理学療法教育校のみならず、仙台医療技術専門学校の卒業生に対しても卒業研究に関するアンケート調査を行っている。それによると、卒業生47名のうち38名（80％）が「全てのカリキュラムの中で必要だった」と回答し、その理由として「在学中の能力向上」や「態度形成」「卒後の実践現場での情意面」や「研究場面での能力への影響」を挙げていた。学生が専攻する学問分

野や希望する進路によっても異なるのであろうが、これらの先行研究および本研究の結果より、卒業論文を熱心に取り組ませることは多くの能力の習得あるいは向上に有効であり、かつ、卒業後にも有益であることが示唆された。

B．ゼミ配属の制度と卒業論文を核としたカリキュラム構築の意義について

ゼミの配属時期については、半数近い学生が３年次前期にゼミを開始することを希望しており、ゼミの開始が3年次後期からである國學院大學人間開発学部の現在のカリキュラムについては再考する余地があることが、本研究の結果よりうかがえた。出村ら[5]の卒業論文執筆に関する参考書では、４年次の１月に卒業論文を完成させるまでのロードマップとして、３年次12月に「テーマの提出」、３年次３月に「問題の所在と仮説の設定の提出」、4年次4月に「研究計画書の提出」、4年次５～８月に「実験・調査の実施（中間報告）」、４年次９月に「データ解析結果の提出」、4年次10月に「論文の下書き提出期限」、4年次11月に「論文の仮提出（指導教員による査読開始）」、4年次12月に「論文の修正」、4年次1月に「完成論文の本提出」という流れが示されている。一方、國學院大學人間開発学部では卒業論文の提出は12月下旬であるが、出村らの参考書のように3年次12月にテーマを提出させ研究に着手させるためには、現在の3年次後期（９月下旬）にゼミを開始したのではテーマの決定まで２～３ヶ月しかなく、出村らが示すようなロードマップのとおり進めるのはゼミ活動開始の時点で既に困難であると言わざるを得ない。既に述べたとおり、本研究の対象学生は多くが「４年次４月～６月」になってから卒業論文の研究テーマを決めており、卒業論文のための研究への着手に至っては多数が「４年次の７月～９月」という状況となってしまっている。４年間の集大成としての卒業論文執筆には3年次におけるゼミ活動を通しての専門的な指導が重要であり、卒業論文に早く目を向けさせたり、テーマを決定させるにあたって学問的な興味関心を問い直させたりするためには、今回の調査において多くの学生が希望していたように、３年次前期開始時にあわせてゼミ配属を行うことなども検討すべきであろう。

中世古[6]は、学習院大学文学部において卒業論文を提出した学生603名に対して卒業論文への取り組みと学生の成長感に関してアンケート調査を行い、インプット要因である入学前学習姿勢、卒業論文に先行する学習経験である授業取組み、学士課程教育の終盤の学習経験である卒業論文取組みのそれぞれが、アウトプットである成長感にそれぞれどの程度影響するのかというモデルについてパス解析を行った結果について報告している。それによると、「入り口では学士課程教育への準備ができた学生を入学させ、卒業論文執筆に向けて授業等でしっかりと鍛え、最終学年でも気を抜かないように意欲的に卒業論文に取り組ませる」という、学士課程教育の一連のプロセスが機能する重要性と、そのなかで卒業論文が果たす役割が大きいことを示している。卒業論文に関して、カリキュラムや制度をどのようにすれば良いかは不明な点も多いが、一方で、カリキュラムや実施方法、評価方法などを改めることによる効果も報告されている[7]。また、中村ら[8]

は１年次に基礎ゼミナール、２年次にプレ専門ゼミナール、３年次に専門ゼミナール、4年次に卒論ゼミナールの性格を持った各ゼミをそれぞれ通年で配置している嘉悦大学の例をもとに、卒業論文の執筆に向けた３～４年次のカリキュラムについて次のように述べている。「（４年生の卒論執筆のためのゼミに先立って、）３年生のゼミナールは専門ゼミナールの位置を占める。２年間指導を受ける担当教員についてそのゼミのテーマの専門領域をはじめて本格的に1年間学ぶ。（中略）この2年において、専門分野の理解を深め、研究テーマを見つけ、４年間の勉強の集大成として、卒業論文執筆に取り組むのが、嘉悦大学のゼミナールということになる」。このことは、言い換えると、３年次に１年間かけて専門的なゼミ指導が行われるからこそ、４年次に集大成としての卒業論文執筆ができるということを意味するものと解釈できる。本研究のケースと照らし合わせるならば、「３年次前期が望ましい」と学生が希望するゼミ配属の時期や、多数の学生の卒業論文のテーマ設定が「４年次４月～６月」、卒業論文への着手が「４年次の７月～９月」となってしまっている現状について再考し、卒業研究およびゼミ活動を通しての学びをさらに向上させていく方策を検討すべきだろう。黒河内[9]は、卒業論文を大学教育の集大成としてその学習効果を測定できるようにすることで、大学教育内の内部的接続と、大学と社会の外部的接続が可能になると述べている。具体的には、大学教育の効果をより高めるために、単独の科目や学習活動の改善を目指すのではなく、大学教育全体での内部的接続、すなわち科目間の目的や内容の連携が必要であることや、卒論を大学教育の学習成果を測定するようなシステムとすることで、大学教育の内部的接続と外部的接続（大学と社会との接続）を達成し、社会の期待に応える大学であることを検証できる可能性があると論じている。大学教育の集大成である卒業論文に向けてどのようにして４年間の各科目を相互に連携させていくべきかについて本研究の結果をもとに鑑みると、卒業論文のみ、あるいはゼミ配属以降のみに焦点を絞るのではなく、卒業論文を核として学生の現状を踏まえつつ大学教育カリキュラム全体を構成していくことが、「卒業論文」「卒業研究」を大学教育の内部的接続と外部的接続の接点とするために必要であると考えられた。

最後に、國學院大學人間開発学部では従来行われていた１年次前期のみの初年次教育に関するゼミ科目である「導入基礎演習」に加え、次年度より人間開発学に関する研究手法の基礎を身につけるためのゼミ科目として、１年次後期に「専門基礎演習」を開講する予定である。今後、この科目の効果なども検証しつつ、卒業論文を核とした大学教育カリキュラムの在り方について、さらに検討していくことが求められる。

引用・参考文献

１）中央教育審議会. 平成20年12月24日 学士課程教育の構築に向けて（答申）.（2008）

２）篠田雅人, 日下田岳史. 人文科学系学科における卒業論文の意味するもの－学科における現状認識と、操作変数法による執筆効果の推定から－. 大学経営政策研究（2013）4, 55-71

３）佐々木誠. 理学療法の学校教育における「卒業研究」に関する調査. 理学療法学（2009）24, 317-321

4）谷村英洋. 文学部での学びと成長 －卒業論文に着目して－. 大学教育学会誌（2013）35, 135-143
5）出村愼一, 山次俊介. 健康・スポーツ科学のための卒業論文/修士論文の書き方. 杏林書院（2015）
6）中世古貴彦. 人文科学系の卒業論文と学生の成長感 －学習院大学文学部における事例研究－. 社会と調査（2014）12, 67-71
7）小林郁典, 森本滋郎. 卒業研究の教育的改善策とその効果. 大学教育研究（2017）14, 69-76
8）中村博幸, 内田和夫. ゼミを中心としたカリキュラムの連続性 ～学生が育つ授業・学生を育てる授業－教員と学生が授業をつくる～. 嘉悦大学研究論集（2009）51, 1-13
9）黒河内利臣. 大学教育における卒論の重要性に関する一考察 －大学教育の学習効果を測定する卒論の機能について－. 大学教育学会誌（2008）30, 90-95

（かわたゆうき　國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授）
（びぜんよしふみ　國學院大學人間開発学部健康体育学科准教授）